

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

Data

監督：ダニー・ボイル
製作：アンドリュー・マクドナルド
脚本：アレックス・ガーランド
出演：キリアン・マーフィ/ナオミ・ハリス/ミーガン・パー
ンズ/ブレンダン・グリーン
ン/クリストファー・エクル
ストン

28日後...
(28 DAYS LATER)

配給/20世紀フォックス映画

2003 (平成15) 年10月13日鑑賞

👁️👁️ みどころ

「感染症」の恐怖！エボラ出血熱、SARS騒動を経験した今の人類にとって、この感染症という言葉ほど戦慄を覚える言葉はない。ロンドンでそんな恐怖が現実のものとなった！人っ子ひとりいないロンドンの街は不気味。感染は血液を媒介とするもの。感染者は狂暴化し、次々と人間を襲った。しかしもっと恐ろしいのは、人間の凶気。「生存者」としてやっと「救出」された主人公たちを待っていた次の戦いとは・・・？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<ロンドンで大ヒットのコワーイ映画>

この映画の前半の舞台はイギリスのロンドン。ロンドンで発生したウィルスによる感染症によってたちまち感染者が広がり、ロンドンは「無人の街」となった。そしてドラマの後半は第4封鎖隊がいるとラジオ放送されたマンチェスターが舞台。ここでは想像を絶する人間同士の戦いが漸たに加わっていく。人っ子ひとりいないロンドンのウエストミンスター橋やテムズ河畔、トラファルガー広場等、有名な観光名所は不気味だ。

<ウィルス感染症の内容は？>

感染症は血液を媒介とするもの。映画の冒頭、その「感染」のシーンが描かれる。場所はロンドンにある霊長類研究所。ここには狂暴化したチンパンジーたちがガラスの檻の中に閉じ込められていた。周辺のモニターに繰り返し流される映像は、暴動、殺人、戦争の場面ばかり。そこに「突入」してきたのは動物愛護団体の活動家たち。彼らは虐待を受けているこれらの動物を「解放」するため侵入してきたのだ。これを発見した係員が、「この

動物たちは感染している!」、「その解放は危険だ!」と警告するが、それを無視してガラスの檻を解放。するとたちまち狂暴化したチンパンジーは人間の喉に噛みついた。そしてその人間は数秒のうちに感染。その症状は発疹や目の充血、内外の出血というものだ。そして精神を破壊された感染者は「攻撃的」となり、人間に対しても噛みついていく。感染者に噛まれたり、感染者の血が体内に入れば、その人間も即感染。感染者の治療法はなく、ただ死を待つのみ。ただし、ウィルスの意志なのか、感染者同士は殺し合いをしない。

<主人公は偶然の生き残り>

この映画の主人公ジム（キリアン・マーフィ）は、ロンドン市内の病院で目覚めた。交通事故に遭って病院に運びこまれたまま意識を失っていたのだ。そして目覚めてみると病院の中はもちろん、街の中にも誰ひとりいなかった。「HELLO!」と声をかけながらロンドンの街をさまよい歩くジム。ある教会の中に入ると死体の山。そんな中、表情の変わりきった牧師が凶暴なうなり声をあげながらジムに迫ってきた。思わずこれを払いのけるジム。

感染者から追われるジムを助けたのは、「生き残り」のマークとセリーナ（ナオミ・ハリス）。しかしマークもその後すぐに感染。セリーナはこれを容赦なく殺してしまった。感染者は10～20秒以内に情け容赦なく殺すこと。たとえそれが親子、兄弟、親友であっても。それが生き残るための唯一の途だということだ。

さらに「生き残り組」がいた。それは高層アパートの上階に住んでいたフランク（ブレンダン・グリーソン）とその娘のハナ（ミーガン・バーンズ）だ。ジムとセリーナは数日間ここで安らかな時間を持ったものの、水や食料が尽きては生きていけない。4人の生き延びる途は、ラジオから流れる自動録音の声。すなわちマンチェスター近郊で待つと放送される第4封鎖隊のもとへ行くことだった。

<生き残りを「救助」した部隊の実態は?>

幸いなことに道路網は寸断されていない。途中でガソリンを補充し、スーパーマーケットで食料を補充（感染者は食料を食べない）しながら、「4人組」は一路マンチェスターへ向かった。しかしやっとたどり着いたマンチェスターの封鎖地点には誰もいない。様子をうかがうフランクが上空を見上げるとカラスの不気味な声が。これを追い払おうとするフランクの目にカラスがつついてきた感染者の血が一滴ポタリと……。するとたちまちフランクは狂暴化し、娘に向かって……。

この感染し、狂暴化したフランクを射殺したのが、第4封鎖隊の隊員。そしてやっとジムとセリーナとハナの3人は、この救助隊が立てこもる建物（要塞）の中に入ることができた。これで一安心……。やっと安全が確保された、と思ったが……。

＜人間同士の新たな戦いが・・・＞

後半、話はややこしくなる。すなわち感染者との戦いから人間同士の戦いに視点が移ってくるのだ。ジムたちが車で運び込んだ食料品に舌鼓を打つ隊員たち。攻撃してきた感染者たちを撃ち殺して喜ぶ隊員たち。そして一人の感染者を鎖で縛ってその生態を観察する指揮官のヘンリー少佐(クリストファー・エクルストン)。みんなどこなくおかしい……。もっともヘンリー少佐の話やその指揮のとり方には別に異常は感じられず、このような「非常事態」の中、冷静沈着に対処し、部下の気持ちもきちんと掌握しているように見える。

しかしそれでも怪しげな感じが否定できない……。

その「化けの皮」がはがれたのは、感染者を追っ払った高揚感の中での隊員たちの「欲望」丸出しの行動。何と隊員たちは、露骨にセリーナに対して性的な目を向けてきたのだ。ヘンリー少佐の命令でいったんはこの混乱はおさまったものの、ジムの抗議に対してヘンリー少佐は冷静にジムに説明した。「自分も部下を失った。そしてここに立てこもって感染者たちが餓死するのを待つが、その後の未来はどうか？私は部下の9名の兵士たちに、女を約束したんだ。女たちは子供が産める。」と。

これは論理的には正しいかもしれないが、明らかに「狂った」人間の発言だ。そのためここからは、感染者VS人間の戦いに加えて、「狂った人間」VS「正常人間」との戦いが展開されることになる。そして映画の冒頭、あのひ弱だったジムがこれらの戦いの中でたくましくオスとして成長し、セリーナとハナの2人の女性を守っていくわけだ。

＜終わり方は本編パターンと別パターンの二種＞

この映画は原作本はなく、イギリスの人気作家アレックス・ガーランドのオリジナル脚本によるものだそうだ。もっともパンフレットの中では、ガーランド自身は、『『28日後...』はオリジナル脚本の作品で、原作は特にない。ただ、その他のいろいろな作品に影響を受け、引用もされているので”オリジナル”という言葉を使うのは、私としてはどこか抵抗がある。』と述べている。また、ガーランドへの取材の中で、脚本は50稿ほどあったが、ダニー・ボイル監督との打合せの中で、いくつもつくり直されたという話が楽しげに述べられている。そのせいだと思われるが、この映画の終わり方には本編とは別のパターンがあり、それが本編終了後「参考」としてスクリーンに流される。このストーリーをすべて書いてしまうのはあまりに「ヤボ」というものだから、これ以上触れないが、キーワードは、最初のシーンで主人公のジムが人を求めてロンドンの街をさまよい歩きながら叫ぶ「HELLO!」という言葉。すなわち、ここに人類の未来が見えるわけだ。それにしても怖かった……。

2003(平成15)年10月14日記